

我慢

邪見憍慢悪衆生 信受持甚以難

真の仏弟子たらんことを求める者の、一番恐るべきことは、不知不識の間に、心に底を造ることである。心に底が出来ると、底なき我を領解することが出来ず、大悲の底なき深さを領解することが出来ないが故である。如来と我とを見失って、我慢の心が生きてゆくに至れば、そこには、ほんとうの意味においては、道も光もなくなるが故である。されば如来に生きるものは必ず邪見憍慢を知る。

「よい人間になれるようなら仏はいらない。よい人間になれんから如来がおいでなのだ。」と言う人がある。如来の救済は悪人正機であるが故に、この言葉に対して、何等の非難のうちどころもないようである。しかしその人の生活を通し、この言葉の持つ臭いを通して、この言葉を受け取る時、これはただ心の奥に底を入れて、その上に教えを組み立てて賛成し、ついでにそれを自己の清算しきれない部分の言いわけに使っているにすぎない。邪見の頂きと言うべきである。

この世の生き方は、徹頭徹尾五欲煩惱の享楽に根城ねしろをすえ、損得根性から、死後の極楽往生をも得ようとする人、こうした人は必ず仏語を弄び、仏語の中から自分の都合のいい部分だけをぬき取って、信心を手造りする。こうした人に限って、少し深いことを聞かされたり、心の奥底にこたへることを聞かされると、「それほどにしないで、自己の正体に当面することを避けようとする。邪見我慢の一相である。」とか、「悪いことをやめよのお慈悲ではない」とかと、横に逃げ

ものゝ正体にふれず、病源をつきとめないで生きる者の生活は、その場すぎである。家が火の車になっているが故に酒にひたっている男のように。宗教は、苦を忘れさす悪酒でなくて、苦にまともに直面して、苦の中に開く道に、生きあがらせようとする智慧の世界である。

「極楽参りの一段については、どうか安心して下さい。」と言う老人が多い。しかしその人の实际生活になると、墓場の彼方に持ち越さねばならないほどの怨みを持つていたり、その人の我慢が一家の者を虐げて、暗の中心、冬の冷たさの中心になっていたりする時、仏法を聞いていることさえが、我慢をつのらせる悪いことになっている。

「仏法は無我にて候。」

これは、人間最初の問題であり、又最後の問題である。されば「我」こそ最も恐るべき怨敵であり、悪魔である。この悪魔は、ものすごくそつと歩みよって、人格の主座に食い入り、不知不識の間に、完全に我を暗の中に引き入れている。

如来真実の光なくしてどうしてこの悪魔の正体を突き止めることが出来ようぞ。

我のみ真に大法を領解した、と思う心すら我慢である。すでに大法はものを言わずして、得たと思う我慢のみが拳をふり上げている。蓮如上人が「得たと思うは得ざるなり」と試めたもうゆえんである。

如何に大法を獲得したとて、得た者によって大法は少しもその尊さを増してはいない。あくまで大法の尊きであつて、誇るべき何ももの衆生にあるのではない。領解を誇るが如きは、まことに我慢と言うべきである。

弟子として師を尊ぶは当然である。しかし一步誤つて、師をかつぎ上げても頭が下らず、師をかつぎ上げて、それを通して自らの名利を満足せしむるが如きは、帰依僧に似て、実は悪魔に食い入られているのである。

法然上人が、その畢生の大業たる選択本願念仏集を造りたもう時、特に選ばれて執筆の役を務めることになった安樂房が、その特に師に選ばれたことを喜び、傲慢心をおこすや、法然上人は、安樂房をやめさせて真觀房をして代わらしめたもうた。

親鸞聖人には「我こそは、智慧第一の法然聖人の弟子であるぞ。」と言つたような我慢は微塵も見ることが出来ない。師を仰げばいよく、大勢至の化身にてましく、我を觀ずればついに愚禿である。そこにあるものはただ謙恭なる無我の信のみである。

一人の病人がある。

「早くよくなりたい。よくなつたら起き出でて、今までの御恩返しをするのだ。大法のお役に立つのだ。師のために犬馬の勞をとるのだ。師は我を力にしている。」と言つたとする。如何にも殊勝に似て、すでに我慢の悪魔はその人の心髓に食い入っている。かゝる場合、人には三つの思いがおこる。

一、我こそは今大法のお為になつている。

二、今は大法のお役に立つてはいないが、いつかは大法のお役に立つことの出来る自分である。

三。我はついに大法に叛き、大法を無視して、逃げようとする罪惡深重の輩である。しかるに如来はその我を撰取して救いきりたもう、と喜ぶ人。

大法のお役に立つ者と思うが如きは、真に我を領解せぬ者である。そのまゝでは必ず大法の園にあつて、逆惡の尻尾を出すであらう。「これだけ尽くすのに、師は自分を認めてくれない。」と言うのが最後の捨てぜりふとなる。腹の底に捨てきらぬ一物があり、自分を肯定した微塵ほどの我があるならば、必ずそれが大きくなつて命とりの大病となるであらう。腹に一物あるものは、頭を下げるに似て頭を下げず、一切を見るに我をもつてし、如来をすら凡情を通してはからう。

如来善巧方便によつてかかる輩も、大法の席に出され、いつしか宿善開發して、大悲本願を領解し、罪惡深重の我に覚めるのである。罪惡深重なる久遠の業苦の正体に直面する時、我ははじめて打ち破られて、自然に純粹に如来の大悲に撰取されて、その名号を聞信するのである。如来本願の名号は、罪惡生死の現実のありのまゝに覚めて、合掌恭敬に生きる者の念仏の境に輝きたもうのである。邪見傲慢は、仏智によつて、邪見傲慢を知ることによつてのみ救われる。